

小栗上野介忠順（ただまさ）

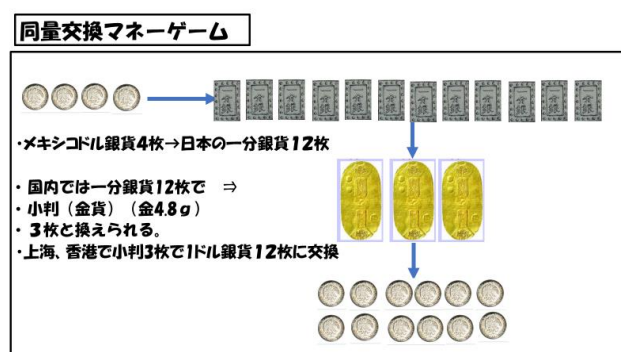
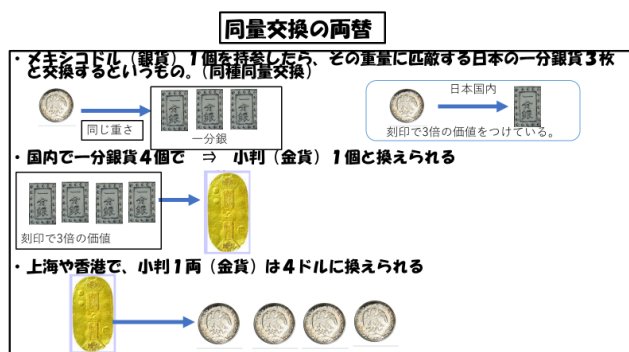
2019年1月18日 平川敏彦

小栗家の先祖

- 桓武平氏の流れを組む。茨城県真壁郡協和町小栗に小栗城跡がある。小栗助重の時足利成氏に滅ぼされる。常陸小栗家が滅亡する。分家の三河小栗家をたよる。
- 小栗正重の時代に妹が松平親氏の諸長子信広の孫勝重の弟信吉へ嫁ぎ長男忠吉を生む。信吉には継嗣子勝長がおり、折り合い悪く小栗正重は妹と吉忠を引き取り小栗家2代目とする。

日米金銀交換比率の不平等を米国に認めさせる。

- それはハリスの日米修好通商条約から始まった。
- ハリスの目的は通商条約締結と金銀交換比率（為替レート）の決定であった。
- ハリスは日本貨幣価値が1/3になる不平等な条件を通常条約に差し込んだ。その結果外国人商人はドル二分銀一小判一上海香港で両替して3倍のドルを手に入れた。



- 日本の経済は大混乱となった。幕府の人材は悲惨な状態。これに立ち向かったのは水野忠徳であったがハリスや英国公使オールコックの圧力で水野は罷免される。
- ハリスはこの両替で2億数千万円の蓄財をした。
- 通商条約にお批准書交換のため正史新見副使村垣目付小栗の使節団が渡米する。水野は小栗に「しかるべき人へ訴えて認めさせる」ことを託す。



小栗は20ドルと小判5枚を溶解して金の含有量を比較した。

- 小栗は国務長官に論理的に金銀の価値を説明し納得させた。すぐに改定にはならなかったが小栗は新聞で高く評価された。

○同時期水野が英国大蔵省のジョージ・アーバナットへも分析依頼をしていた。

○アーバナットはオールコックを呼び日本の主張が正しいことを告げた。

オールコックは著書「大君の通貨」でハリスの所業を書き立てた。

日本人初めての世界一周

○咸臨丸はサンフランシスコの往復だったが小栗上野介一行は米艦ポーハタン号ーロアノーク豪ーナイアガラ号を乗り継ぎ世界一周をして帰国した。勝海舟、福沢諭吉はサンフランシスコから帰国。

横須賀に製鉄所（後の造船所）を建造

○帰国後近代化の必要性を感じたポ線りは積極的に鉄工所（造船所）の建造に力を注ぐ。

○きっかけは軍艦奉行の勝海舟が将軍家茂から直接神戸操練所の開設を直訴し承認された。勝は朝廷に海軍の必要性を長々と説いた結果、朝廷は摂海警備で広大な製鉄所を設立して攘夷に必要な堅鑑・巨砲を供給せよと幕府へ命じた。

○慶喜と小栗は心をつにしてフランス公使の話聞き財政的支援を受け幕府の軍事力を強め威信を高めようとした。

○友人で外国奉行も務めた栗本鋤雲がフランス公使ロッシュと親しいこともありフランスから絹の独占販売権を担保に2回目は北海道開発権を担保に大型借入れをして横須賀に造船所を建造した。「徳川が倒れんとする今こんなことをやらなくても」といわれ「蔵付きの家で渡した方がよい」と語った。後に戦いに勝利した東郷元帥は「勝利できたのは小栗が造船所を作っておいたからだ。」と感謝の言葉を述べた。

○幕府は最終的に長崎と横須賀を造船所、横浜を製鉄所と改めた。

上野介を名乗る。

○老中が豊後守を名乗ったので小栗上野介は豊後守を変えねばいけなかった。

○上野介は縁起が悪いとさけられていた。①新田義貞②佐倉城主堀田③宇都宮城主本田④吉良上野介
小栗は気にせず上野介を名乗った。

日本初の株式会社「兵庫商社」設立

○渡米した際にパナマ鉄道を訪れた。そこで建設資金や民間資金で事業を起こせることを知った。帰国後兵開港をチャンスとして「兵庫商社」を設立。役員や定款もそろえた本格的なものだった。

大阪中之島に事務所を置いて活動を始めたが半年で幕府崩壊とともに解散した。

徳川慶喜に最後まで徹底抗戦を訴える。

○鳥羽伏見の戦いで敗戦。将軍の配下は会津藩（松平容保）と桑名藩（徳川定敬）と幕府海軍（榎本武揚）で統率がとれていない。旗本（徳川家臣）は江戸にいる。大名は徳川に恭順しているとは言え徳川と対立する勢力が出ればどちらでもよい。敗戦の一因は会津藩、桑名藩の武器が旧式だったこともあげられる。

○オランダ留学し海軍を学んだ榎本武揚（たけあき）率いる幕府艦隊は無傷。鳥羽伏見の戦いで大阪湾で

活躍した実績もある。小栗が訓練したフランス式幕府陸軍の健在だ。(小栗、榎本、大鳥、水野忠徳)
○駿河湾で榎本艦隊が東下する西軍に砲撃を加え残兵がかろうじて箱根の山を越えたとしても小田原で待ち受ける新式幕府陸軍が迎え撃てば西軍を壊滅できる。と主張したが慶喜はこれを退け小栗に「お役御免」と罷免を申し付けた。

○小栗の考え「日本人精神と外国からの優れた科学技術を受け入れる」と慶喜の「西洋かぶれ」二人には大きな溝ができていった。

権田村へ移転途中大成村の普門院へ立ち寄る。

○上野介は4代忠政を尊敬していた。昨年普門院は火事で多くを焼失していたが上野介の寄進で再見が完了していた。忠順は忠政夫妻の永代供養費と家宝の槍と具足を納めた。(絵が残っている)

○荷物が多く半分を普門院へ置いていった。これが後に事件となる。

罪なくしてとらえられ詰問もされず斬首。

「小栗上野介のすべて」「村上泰賢著」「新人物往来社」より

≪引用開始≫

○権田村への引っ越しは行列となった。これが軍用金の噂となった。これが暴徒を生み一行を襲ってきた。暴徒は膨れ上り2000人にもなった。幕府からの預かり金500両(5000万円)(小栗日記)

これが後の徳川埋蔵金伝説となる。結局小栗は鉄砲などで追い払った。

権田村に屋敷を構えた忠順は西軍の標的となっていった。

① 2000人の暴徒を追い払った元幕府の第1の主戦論者でありこれから関東に入ってくる西軍にとっては見逃せないことであった。(暴徒は西軍の陰謀説もある)

② 西軍への忠誠心を表すには小栗を訴えることが手柄になる。

③ 西軍にとって小栗は近代化政策を次々に実行してきた恐るべき実力者で逢った。

④ 西郷が江戸でテロを起こしたが小栗の指揮で薩摩屋敷が焼き討ちされた。それも背景にあった。

○忠順は危険を察知して母と妻他女性を会津へ逃がした。

○「陣屋等嚴重に構えて」「砲台を築き」「容易ならざる企てあり」「深く探索したところ逆謀判然」

高崎、安中、吉井3藩で追捕せよ。とのことで3藩の使者は「反逆の意図は見られない」と報告する。

○陰で板垣退助か巡察使大音龍太郎の遺構が働いて一気に殺害と進んだと思われる。

○忠順は捕らえられたが取り調べは一切なかった。

○忠順はついに斬られて鳥川の露と消えていった。

上野介忠順の首のゆくえ

○西軍は草津街道の土手の上に家臣の首と共に青竹に刺して晒し首とした。まもなく忠順の首だけ取り外して高崎へ運び館林で岩倉具定が形だけの首実検をした。

これ以後は2つの説がある。

≪東善寺説≫

○主従の首のない胴体の遺体は村人がもらい受け東善寺へ埋葬した。上野介には木で作った首をつけ

た。

- 首は**泰安寺**住職へ下げ渡したが墓地がなく**法輪寺**へ埋めてもらった。1 周忌に近い日数名が法輪寺住職に首の奪還を掛け合った。住職は「知らぬうちに誰かが盗掘した」ことにした。
- 首は焼酎漬けになっていた。それを取り出して首を東善寺の胴体と継ぎ一緒に葬った。
- 昭和 30 年代後半**になって、当事者（太源治）が「祖父や親から堅く口止めされていたけれど、もう大丈夫でしょうから…」と告白した。
- 盗んで来た首を東善寺の墓に埋め戻したとき、「胴塚を掘るとそれまでつけてあった木の首が傾いて



肩のところにあった。それを取り出して本当の首を継ぎ埋葬した」と、語った話を住職村上照賢（前住職）に打ち明けた。

《引用終了》

小栗上野介の首級を埋めた本墓
(東善寺)

《普門院説》

「海軍の先駆者小栗上野介」阿部道山著より

《引用開始》

「忠順の使いとしてしばしば普門院を訪れていた用人武笠祐左衛門の妻の実家は馬宮村の永田家である。忠順が江戸を出発する時忠順が江戸を出立する時、祐左衛門は病気のため永田家に滞在しており、代わりに息子の銀之助を忠順の養子又一の側付として遣わした。

忠順処刑後、養子又一に従っていた銀之助は又一とともに高崎藩に預けられたが逃亡し、**鳥川畔に梟された上野介の首**を持って関東に下り、**菩提所の普門院**に到り、大猷和尚に面し始祖**忠政公墓側**に**秘葬**して、身を母方実家たる永田家に隠したのである」（要約）

《引用終了》

さいたま市公民館の講座では

- 明治 10 年 1877 年銀之介は旧浦和市三室村の名主家で同姓の武笠武貞の婿養子になり、やがて村長となって村治に尽力大正 10 年 1921 年 69 歳で逝去した。
- 銀之介の曾孫武笠昇氏は「上野介首級あるいは遺髪を銀之助が大宮の普門院に携えたという話もあるが実証できない」と『曾祖父武笠銀之介の一生』で書いている。
- 阿部道山住職が小栗上野介之復権に傾けた情熱と努力は並々ならぬものがあった。それが報われ**昭和 9 年 8 月**に徳川家達題字「小栗上野介招魂碑」が建てられ海軍大将、中将、海軍大臣代理が出席して除幕式が行われた。その後錨と浮標水雷、大砲が海軍省から届き現在も普門院に置かれている。



小栗上野介の首塚と言われている自然石

○さいたま市での講座では高崎市の東善寺についても雑司ヶ谷霊園についても語られず「上野介の首級がどこにあるかは論じない。大事なことは上野介が普門院を大切にしていたということである。」と締めくくっている。

小栗上野介の子孫

- 会津へ逃亡した妻道子は会津西街道の野戦病院で娘』クニ子を出産した。
- 道子とクニ子は東京へ戻り三野村利左衛門の世話になり以後は道子も亡くなり実家の墓地へ埋葬されクニ子は大隈重信夫妻に引き取られた。
- 前島密の媒酌で矢野貞夫（作家の弟）を婿に迎え小栗家 13 代を継承した。
- 普門院の自然石は昭和 9 年矢野貞夫立ち合いで建立した。
- 矢野貞夫・クニ子夫妻は牛込保善寺の先祖代々の墓を雑司ヶ谷霊園に移し小栗家の墓とした。
- 墓標の裏には小栗上野介・道子 矢野貞夫・クニ子と刻まれている。以後小栗家の子孫が管理している。

以上